

階段落ち

内藤 啓子

(エッセイスト)

神奈川芸術劇場で、宝塚歌劇団花組公演「銀ちゃんの恋」を観た。つかこうへい「蒲田行進曲」を宝塚風にアレンジした作品で、主演の水美舞斗みなみ まいが好演、鬱屈まいとした日々を一時忘れ笑って泣いて楽しんだ。

「蒲田行進曲」と言えば、階段落ち。映画「新選組」の池田屋事件を撮影中、銀ちゃん扮する土方歳三に切られた浪人・大部屋俳優のヤスが、命がけで二階から階段を転がり落ちるシーンが要だ。宝塚版でも勿論その場面がクライマックス。暗転ストロボ点滅でスローモーション映像のようにうまく表していた。

ところが、NHKテレビ歴史探偵「真相！池

田屋事件」の録画放送を見て驚いた。第一に、池田屋へ踏み込んだのは近藤勇を含む少人数であつたということ。外で見張りの隊士はいたが中へは四名。土方は後から合流、「御用改めである」と最初に踏み込んではいない。

第二に、浪士たちは捕らわれた古高の心配もしただろうが、刀を預けて飲み会をしていたようだ。新選組にその長刀は奪われ、短刀しか持つておらず、激しい切り合いというより、浪士たちは逃れようと必死だった。二階から中庭に飛び降りた者もいたという。

番組に興味を引かれて調べてみたら、華々しい階段落ちもフィクションであると分かった。

子母澤寛『新選組始末記』にて、近藤によって切られた土佐の北添佶魔きたぞえきつまが二階から壮絶に転がり落ちると描かれ有名になるが、近年の研究で、北添は自刃して果てたことが判明、池田屋の階段も幅狭く小さかったようだ。

この番組を見るように勧めてきたのは従姉である。彼女は以前から、我らの先祖にあたる長州藩士・木村正幹まさもとに関して調べていた。そしてどうやら、池田屋事件のあった元治元年（一八六四年）六月五日、先祖も京都にいたらしいと言う。

内藤 啓子（ないとう・けいこ）



大阪市出身。東京女子大学文理学部日本文学科卒。父・阪田寛夫の秘書、妹・大浦みずきの個人事務所代表取締役

役を務める。著書『赤毛のなっちゃん』、『枕詞はサツちゃん』。

木村は幕末に毛利藩（長州）の大坂蔵屋敷に務めていたと父・阪田寛夫は書いていた。京の長州屋敷で働いていた時期もあったのだろう。維新後は、京都府権典事をしていた。井上馨の子分で、先取会社に誘われ、後に三井物産となった会社の副社長を務めた（社長は益田孝）。理財・事務方面に能力があったようので、会社を内から支えた。最後は三井家監査役就任のため、退社している。

木村正幹の娘、私たちの曾祖母にあたる大中幹おほなかは私が物心つく頃まで存命、一九五九年に八十九歳で亡くなった。最晩年は、娘である阪田京の一家眷属と大阪市阿倍野区に住んでいた。おばあさんが二人いてややこしいので、区別するために私たちは、曾祖母を「ちびばあ」、祖母・京を「おつきばあ」と呼んでいた。「ちびばあ」の部屋へ遊びに行くと水飴を貰えるのが楽しみだった。殆ど寝たきりで、枕元に置いた黒光りする鈴を鳴らしつつ「どーなーたーか、きーてーくーだーさーい」と声を張り上げて呼ぶ。「三井さまの奥さま、お嬢さま」に可愛がられ「木村のみいちゃん」と呼ばれていた

と、二言目には自慢していた。

池田屋事件に戻ると、新選組の目標は池田屋のみでなく、浪士のいそうな店や宿を京のあちこちで探していたようだ。正幹ではないかと思われる木村甚五郎は、長州藩御用達の「魚品」という店にいて新選組に捕縛される。やはり飲み会の最中だったのか。

同番組にも出演した中村武生氏の『池田屋事件の研究』によると、長州藩屋敷留守居役乃美織江の手記があり、どうやら木村は久坂玄瑞と間違われ逮捕されたらしい。乃美は一橋慶喜のもとに向き「潜伏人」（浪士）ではない者を殺したり逮捕することに抗議をした。特に木村は屋敷の正規の役人として提出した名簿に名前が載っていると訴え、無事釈放された。木村と久坂は年頃や体格が似ていたらしい。久坂は一八〇センチ近い説もあり、木村も背が高かったのか。知る限りでは大名家の人たちは大きくない。もう一つ同著の「召捕之浪人姓名調写」によると、木村甚五郎二十八歳とある。萩の図書館にある資料は正幹（セイカンとルビ）は天保八年生まれとあり数え年なら合致するが、天

保一四年生まれ説だとこの時二十一歳。どちらが正しいのか。こういう面白い話が子孫（身内をネタにする父）まで伝わっていないのも謎である。

明治の初め頃まで木村源蔵と名乗っていたことは分かり色々資料も見つかる。大阪阿倍野にある長州藩「死節郡士之墓」の裏に「築造係木村源蔵」（明治二年建）とある。従姉が見つけた日大法学部蔵の文書にも「京都府権典事木村源蔵来話京府と京都裁判所との訴訟云々」と記載がある。京都博覧会の碑（明治一三年建）には京都府前典事木村正幹とありこの頃には正幹になっている。

ネットで色々検索していたら、正幹の書いた文に對して「読む気にもならない悪筆」という感想があり、この遺伝子は間違いない子孫まで伝わっていると思った。